八十八膳献穀会　会報

結 yui 第19号

鎮守の森と村祭り

矢吹　道徳

出張の折、列車の窓から外を眺めていると、街中と言わず、田園・里山と言わず、こんもりと茂った森が点在しているのが目に入る。大概鳥居があるので、神社が祀られている鎮守の森である。恐らく、そこでは地域の住民による、春季・秋季の村祭りが行われているのではないだろうか。鎮守の森、そこは地域共同体の共同祖神の祭祠の地である。

私の住んでいる高久地区には、八幡地区に八幡神社、馬場に八剣神社、馬場と根岸の境界付近に二荒神社がある。この三社が明治維新の宗教政策によって社格が設定されたときの旧村社にあたるのではないかと思う。ちなみに上は、国家が弊帛（へいはく）を奉ずる官弊社に始まり、県社、郷社、村社と階層化された。高久地区の村祭りは、春の御輿（八剣神社御祭礼）と、秋の三匹獅子（八幡神社御祭礼）が行われ、地区内を巡幸する。

三匹獅子とは、雄獅子・中獅子・雌獅子の三匹である。市内にはかつて五十を超える獅子舞があったようである。県内では会津の春の彼岸獅子、北は津軽、南は群馬・栃木などでも三匹獅子が見られるようだ。高久地区の獅子舞は、四年に一度の持ち回りである。

口伝によれば、下三ヶ所（原・川和久・八幡）が始めたとのこと。その後、中三ヶ所、馬場、根岸が加わり、各地区四年に一度の祭典執行となる。昔は青年会長が祭典執行委員長となり、獅子は農家の長男が担い、棒使いは男子の小学生となっていた。しかし、少子化と過疎化の中、青年会は消滅し、町内会にあたる常会が祭典の執行にあたっている。

獅子は男子であれば農家非農家、長男・次男を問わず、棒使いも、男女を問わなくなっている。伝統芸能の継承が危機に瀕しているとも言える。私は幸運なことに中学一年の時に中獅子をかぶり、青年会長の時に祭典執行委員長をさせて頂いた。そのお陰か、その後も祭典の折に、青年世話役や特別会計を仰せつかって、祭典に関わりを持っている。

いわき地域学會副代表幹事の夏井芳徳著「獅子よ永遠に」によれば、現在確認できる最古のものは一六三一（寛永八）年の高野地区とのことである。またいわき市文化財保護審議委員会会長の佐藤孝徳氏によれば、東洋文庫「神道記」に、「人間が獣を殺し、その罪科を禊、また獣（鹿等）の供養をすることが諏訪神社により行われた」とあり、歴史はかなり古くまで溯れるのではないかとのことである。

秋の稲穂がたわわに稔った時に、五穀豊穣を祈りつつ、地域を巡回する祭りの行列は、豊葦原瑞穂の国にふさわしい祭礼ではないかと思うのである。高久地区にも江戸中期の祭礼を記録した古文書があった。

願わくば、これからも絶えることなく、伝承していって欲しいと思うばかりである。

（矢吹　道徳・浜通り医療生活協同組合　副理事長）

年間行事

4月	総　会	10月	芋煮会
5月	田打祭	11月	飯野八幡宮新嘗祭
5月	御田植祭（会報発行）	1月	農立神事
8月	注連縄奉製勉強会	2月	飯野八幡宮祈年祭
9月15日	飯野八幡宮八十八膳献饌		
10月	抜穂祭（会報発行）		研修旅行

八十八膳献穀会　会員募集

現在　奉耕会員　三十名
　　賛助会員　五十四名
　　特別会員　五名

飯野八幡宮の古式大祭で行われる八十八膳献饌神事は、古くから連綿と受け継がれてきたもので、県の重要無形民俗文化財に指定されております。

八十八膳献饌神事を永く守り伝えてゆくために、八十八膳献穀会を発足し、神饌田を設けて、田には餅米を作り、畑では野菜等を栽培し、御神饌として奉納しております。

このご奉納を通じて、日本の伝統的な農耕儀礼の復元と風土に根ざした農耕文化を、新しい世代が理解して、更に受け継いでゆくことを願っております。なにとぞ、私どもの活動をご理解いただき、多くの皆様がご入会くださいますようお願い申し上げます。

原稿募集のお願い

会報「結」は皆様のご寄稿により形成しています。
発行19回を迎え、今後も「結の輪」を広めるべく、ぜひ奮ってご参加ください。
内容・形式などは下記宛てにご連絡ください。

結 yui No.19

発行日　平成21年5月31日
発行所　八十八膳献穀会
〒970-8026
福島県いわき市平字八幡小路84
飯野八幡宮　社務所内
TEL　0246-21-2444
飯野八幡宮web
（「結」既刊分はこちらへ）
http://www.noteplan.net/8man/
発行責任者　飯野　光世

権現祭あれこれ　前編

小泉　明正

権現祭とは、前年の新嘗祭（収穫祭）の後、山に戻られた神様を権現社にお招きし、今年の農作業や農事始めを言問うとともに、区民の無病息災・家内安全・五穀豊饒を祈願するお祭りです。

また、直会の中で行われる『強飯会』は、冬期間休ませていた身体を奮い起こし、「活」を注入する行事でもあります。万物生気に満ちる春を迎え、農作業や山仕事に本格的に取り組み、秋の収穫の時までの長い繁忙な期間を働き抜くために、腹を満腹にしてパワーを充分に蓄えておこうというものです。激辛の辛子味噌だけをおかずにして戴く山盛りのご飯は、生命のスタミナ源でもあります。

地区民が顔を合わせて、お互いの健康を祝しながら、元気を分け合い励まし合って、一年間の激務を乗り切ろうと、先人たちが編み出した素晴らしい生活の知恵です。県内でも数少ない珍しいお祭りなので、いつまでも守り残したい行事です。

『権現』というのは、仏教のことばで、仏や菩薩がこの世の人々を救うために仮に人間等の姿を借りて世に現れることをいいます。応現・示現・権化などともいいます。仏教が我が国に広まる過程で権現思想は在来の信仰とも結びつき、神は仏や菩薩の権現であると考えられました。全国大小の山岳神は、そのほとんどが修験者によって開かれたので権現と称するものが多く見られます。明治元年に神仏分離令が出されてからは権現号を公然と名乗ることは禁じられました。

権現祭は、古来より例年四月八日と九月八日の年二回斉行されてきました。しかし、昭和五十二年下期の区総会決議により、九月の権現祭については熊野神社祭礼と同時に執行することとされました。爾来、四月八日のみが権現祭として行われ、辛子味噌による強飯会の伝統行事として受け継がれ、現在に至っています。

現在の権現社（祠）は、熊野神社社殿の境内西側に鎮座しております。往時、権現社（祠）は権現山の山頂（標高82.8ｍ）のアカマツの古木の根元に鎮座しておりました。権現山は、蘭秀寺墓地の北西に位置し、昔は共同の萱刈場でしたが、今はヒノキ林になっています。

祭礼の前日には、当前が出て参道を整備しました。権現山の中腹から山頂までの参道は、三尺程の幅に萱や草木を刈取り、素足でも歩行できるように整えられました。サカキの神木が立つ参道入口には、注連縄がはられ、ここから山頂の権現社（祠）までは、宮司を先頭に、神饌を捧げ持った参会者が素足で続きました。この時、萱山を裸足で歩いても、不思議なことに誰も踏み抜き（カッパ踏み）はなかったといいます。昭和四十三（一九六八）年、中塩地区農業改善事業を機に、祠を権現山山頂から現在地（標高40.3ｍ）に遷座しました。

――――結二十号に続く――――

（小泉明正・八十八膳献穀会幹事長）

飯野八幡宮初卯祭について

飯野　光世

例年旧暦如月最初の卯の日に初卯大祭が斎行されます。この祭祀は、飯野家文書（重文）鎌倉期の古文書に「二月初卯御祭祀」と記されており、以来連綿と継承されている祭祀です。祭祀の詳細な内容が記載されていないのが残念ですが、大祭式という神社で最も重い儀式で行われていたことが窺われます。

飯野八幡宮の親神様であります京都石清水八幡宮の祭典の中に「八幡初卯神楽」が斎行されております。旧暦二月初卯日、夕刻、神前で焚かれる庭燎の明かりの中、平安時代より伝わる「御神楽」が奏されております。その他多くの神社で初卯の祭典が行われています。

この初卯という日は宇佐神宮の社伝によると欽明天皇三十二（五七一）年の二月の初卯の日に境内の菱形池の辺りの笹の上に、光り輝く三歳の童子が顕われて「われは誉田の天皇広幡八幡麿なり」と告げられ、黄金の鷹になって駅館川の東岸の松の上に、とどまったといわれます。この鷹のとどまったところに、和銅元（七〇八）年鷹居社が造立され、のち霊亀二（七一六）年小山田社に移られ、神亀二（七二五）年に、現在の亀山に移されて、一之御殿八幡大神が鎮座されたのが、宇佐神宮の創立と記されており、すなわち八幡大神様がこの世に出現されたご縁日であり、最も尊い日となっているのです。

旧暦如月初の卯の日は、新暦で通常三月の上旬頃ですが、今年は暦の上で二月二十七日にあたり、祈年祭とあわせて、初卯祈年祭として大祭式で斎行いたしました。祈年祭は秋の豊作を祈願するお祭りで、豊作を感謝する、新嘗祭と対のお祭りです。

これから農作業が始まる時期、心身ともに穢れを祓い社前に額づき、一年間の無事をお祈りする姿は営々と続けられてまいりました。これからもこのような神事を通して、神慮を畏み、祖先の教えを後世に伝えて行くことが肝要かと感じる次第です。

（飯野　光世・　飯野八幡宮　宮司）